

Newsletter

2016.10.6

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

「立教ファーストタームプログラム」の半期を振り返る

全学共通科目 総合系科目担当者連絡会開催報告

全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想運営チームメンバー／理学部准教授 小森 靖

2016年7月22日(金)に本学池袋キャンパスの11号館A203教室にて、総合系科目における「担当者連絡会」が開催され、関係者約50名が出席した。この担当者連絡会は、全学共通科目におけるカリキュラムを運営する教員と科目担当教員とが一堂に会し、授業運営や教育改善のための情報を共有し、議論を行う場となっている。今回のテーマは「立教ファーストタームプログラムの半期を振り返る」であり、2016年度から開始された全学のカリキュラム体系“RIKKYO Learning Style”の概要と授業の実践例の紹介を中心に行った。



始めに、全学共通カリキュラム運営センターの佐々木一也部長より挨拶ならびに、“RIKKYO Learning Style”についての紹介がなされた。

次に、総合系科目構想運営チームの松山伸一リーダーより、全学共通科目の総合系科目の特色についての説明がなされた。“RIKKYO Learning Style”では、入学後の1年次春学期を「導入期」、1年次秋学期～2年次を「形成期」、3年次～4年次を「完成期」とし、導入期には「学びの精神」の科目を、それ以降は「多彩な学び」の科目を中心に履修することになる。

引き続き、全学共通カリキュラム運営センターの中島俊克副部長より、主に履修、成績評価、試験、TA・SAの活用、出欠確認方法、Blackboardの利用等、教務事項の留意点、および2016年度以降1年次入学の学部学生から履修を開始する「グローバル教養副専攻」の説明がなされた。(※詳細は本誌p5を参照)

その後、「学びの精神」の授業実践例として、「大学生の学び・社会で学ぶこと」、「伝統と革新の大学図書館」、「法と政治の世界」の3つの科目について、それぞれ担当者より報告がなされた。(※本誌p2～4を参照)

最後に質疑応答の時間が設けられ、本学のリベラルアーツ教育、授業運営、成績評価、ゲストスピーカー制度、Blackboard等について、様々な質問や意見が挙げられた後、場所を第一食堂に移して懇親会を行った。

目次

- 「立教ファーストタームプログラム」の半期を振り返る小森 靖 (1)
- 「学びの精神」授業実践例①「大学生の学び・社会で学ぶこと」.....原田 晃樹 (2)
- 「学びの精神」授業実践例②「伝統と革新の大学図書館」.....牛崎 進 (3)
- 「学びの精神」授業実践例③「法と政治の世界」.....笠井 昭文 (4)
- 「グローバル教養副専攻」の2つのコースについて中島 俊克 (5)
- 新しい英語教育カリキュラムの特徴—必修英語科目改訂のポイント—.....師岡 淳也 (6)
- 新チームリーダー挨拶(松山 伸一)、大学教育学会第37回大会参加報告(小島 緑) (7)
- 2016年度全学共通カリキュラム運営センター名簿 (8)

2016年度春学期「学びの精神」授業実践例①

「大学生の学び・社会で学ぶこと」

(担当：立教サービスラーニングセンター長／コミュニティ福祉学部教授 原田 晃樹)

この授業は「サービスラーニング」と呼ばれている科目群で、まだ始まったばかりのため学内でも馴染みがないと思います。このサービスラーニングという科目は、一言で申し上げますと社会活動を通じて市民性を育む学習ということで、座学で得た知識を現場で活かし、そこから具体的に実践的な学びを得て、社会に貢献をするという、市民性を育む教授法であります。実践で得た学びを、再び自分の専門科目に活かしていこうといった双方向のフィードバックを意図した考え方です。なお、本学は2016年度よりサービスラーニングセンターを設置し、ボランティアセンターと一体的に運営を行っています。ボランティアでは見返りを求めませんが、学習が見返りであるサービスラーニングはボランティアと似ています。

2016年度春学期で私が担当したのは「大学生の学び・社会で学ぶこと」という、社会に対し問題意識を持つきっかけをつくるという科目です。そこで問題意識を持った学生に対して、より実践的な科目を履修してもらい、現場(フィールド)で体験してもらうことが狙いです。今後は、できる限り体験型の科目領域を確保するため、あらかじめさまざまな現場を用意し、学生が自由に選択できる「自由設定」科目を充実させていきたいと考えています。

授業の内容としては、前半は建学の精神やボランティアとの接続を重視しました。例えば、建学の精神については本学のチャブレンから、正課外の学びとサービスラーニングの関係についてはボランティアセンター職員から、正課教育から見たサービスラーニングの意義や特徴は全カリの担当者から、それぞれ講義をしていただきました。

後半は私から、例えば大学と高校での学びはどのように違うのかといったことや、ノートテイクの手法や読書法などを話したうえで、グループ討議を2回行いまし

た。1回目は、アメリカの自治体は住民投票で自由に独立ができるが、富裕層が効果的、効率的で自分たちの意のままに動いてくれる民主的な自治政府を作り、それ以外は税金が激減しスラム街になってしまったことをどのようにとらえるか議論し、その上で、市民や政府の役割について討議しました。2回目は、認知症の高齢者が一人暮らしで生きるために何ができるのかを討議し、そこから市民としての役割や相互扶助、そしてそれを支える公的基盤の必要性を学び、公共サービスと行政サービスは必ずしも同じではないといったことを振り返りました。

授業を通して、特徴的で非常に重要であると感じたことが2つあります。1つ目は、この授業が建学の精神や教学理念を学ぶ貴重な機会であったということです。ボランティアセンター職員が1960年当時の履修要項を持参して学生に見せてくれたのですが、学生に求める基本的な学びの姿勢は変わっていないことに驚きました。

2つ目は、この授業では4回、本学職員が講師として参画しましたが、これが学生にとってのロールモデルになったということです。今回協力いただいた職員の講師は、大学を卒業して社会に出てから必要性を感じて改めて大学院などに通い、自分の専門知識を身に着けていった方です。それが学びの意義や社会とのかかわりを考える上で、学生には刺激になったようです。

今回の反省としては、授業のボリュームが多く、学生からのリアクションペーパーや職員の授業内容を踏まえた授業を展開する余裕がなかったことです。

今後の課題としては、正課、正課外の両方を踏まえたうえでの実践的な学びをどのように促していくかということ、また、授業には教員だけでなく職員の参画や積極的なサポートを通じて議論していけるような関係が広がっていけばよいのではないかと考えています。

シラバスの内容(抜粋)	
授業の目標	立教生が、社会の一員として現在生起している社会問題を科学的に認識し、その解決に向けて、実際に問題に関わりながら、更に学びを深めていく視点と態度の習得を目標とする。
授業の内容	この授業は、アメリカで発祥した体験型の学習手法「サービス・ラーニング」の考え方に基づいておこなう。授業の前半は、立教大学の歴史と建学の精神を学習することを通して、「科学知(キャンパス知)」と自らの体験を通しての気づきや学びの成果である「体験知(フィールド知)」の循環的学習の方法について理解を深める。授業の後半は、担当者(原田)の専門領域と社会に存在する自分と社会の課題に関わる基礎的知識と方法について、学習する。
授業計画	1. オリエンテーション・授業の目的、ねらい、進め方、受講に際しての準備
	2. 立教大学の建学の精神と立教大学の学び
	3. ボランティア・キャンプなど正課外教育における学び
	4. 大学での様々な学び方・サービスラーニング、体験学習、アクティブラーニング、初年次の学び
	5. 上級生の学びの体験から学ぶ・先輩の体験に耳を傾け、質問し、自分の大学での学び方を考える
	6. ディスカッション「大学で学ぶこと」・今までの授業をとらえて、自分が考える大学での学びを共有する
	7. 社会人としての大学生の学び①
	8. 社会人としての大学生の学び②
	9. 社会人としての大学生の学び③
	10. 社会人としての大学生の学び④
	11. 社会人としての大学生の学び⑤
	12. 社会人としての大学生の学び⑥
	13. 社会人としての大学生の学び⑦
	14. まとめ
成績評価方法	筆記試験 60%
	平常点 40%(毎時間のリアクションペーパー)

2016年度春学期「学びの精神」授業実践例②

「伝統と革新の大学図書館」

(担当：兼任講師 牛崎 進)

私は2016年3月に本学の職員を退職しましたが、過去に司書課程で非常勤講師を務めていたこともあったため、今回このようなテーマで授業を担当させていただくことになりました。授業は火曜日の1限目で、114名の登録者でした。途中6月に最終登録者が確定するということでしたので、それまでは欠席者状況に注意しながら進めていましたが、ドロップアウトする学生はほとんどいませんでした。

授業運営では、授業の大きなテーマが「情報リテラシー」ということもあり、本授業のTA(本学大学院生)に協力してもらい、SNSをテーマに事例の発表等をしてもらいました。また、本学図書館職員の協力で図書館に関する講義「OPACでできることと、できないこと」を1回担当してもらいました。

内容についてはシラバスに記載の通りですが、1年生から本学の図書館利用が習慣化するよう意識して進めました。学生は図書館も利用しますが、情報の入手ではスマートフォン(携帯電話)やパソコンに大きく依存しています。迅速に効率的に無制限に情報と接する世界でスマートフォン等を使い続けながら、それだけでは済まない世界で、学問的、体系的かつ安定的な情報については図書館を上手に使うことを奨めました。図書館から情報世界を見るというより、情報世界から図書館を見て図書館の活用を促すというアプローチを取りました。

この授業は「学びの精神」の科目ですので、全カリの目標として挙げられている3つの点に配慮しました。①「大学で講義を受講する包括的スキルを体得する」。②「大学における学習到達度チェックの仕組みを理解し、自ら主体的に学ぶ姿勢を涵養する」。③「立教大学の学生としての順調なスタートを助ける居場所感を醸成する」。②はある程度、技術的に行えますが、①と③は、特に毎回意識しながら授業をしました。

授業の構成としては、挨拶から始めて、立教大学のここ1週間のニュースや話題、週によっては大学の歴史や

今後のビジョンをできるだけ話すようにしました。情報源はホームページですが、立教大学に在ることの意義を学生に認識してもらおうと思い、毎回行いました。次いで、前回の授業の振り返りを毎回行いました。これはBlackboardに次週の授業に向けて、前週金曜日の17時までに、次回の授業内容を掲載するとともに、前回の授業の振り返りの内容と、学生からのリアクションペーパーに対する私のコメントもしくは回答を載せました。その中で、特に触れたほうがいい内容については、翌週の授業で説明しました。学生はリアクションペーパーに書けば、必ず何か応えてくれることを理解したようで、リアクションペーパーには大学への要望・質問を含めて多くのコメントが書かれるようになりました。学生への課題としては、提出物(宿題含む)を2回求めました。

反省点としては、情報リテラシーの習得を図るために、もう少し演習に時間を取りたかったということと、もう少し宿題を課してもよかったのではないかとということが挙げられます。また、学生がどのようにノートテイクをしているのかについて、実際に確認すべきだったのではないとも思いました。さらに、グループワークを1回試行しましたが、少し準備不足でした。

今回の授業を担当するにあたり、大学のホームページを相当見たのですが、大学や学部のリベラルアーツへの取り組み、そしてそれらを支える部局(図書館)の取り組みについて、具体的にないという印象を持ちました。特に学生にはピンときていないようでしたので、もう少しリベラルアーツそのものや、立教のリベラルアーツ教育について、具体的に紹介してもよいのではないかと思います。

また、元職員としての反省でもあるのですが、大学は、学生のためにさまざまな改善をしていますが、もう少し学生の目線に立つべきではないか、また広報が不足しているように感じました。

シラバスの内容(抜粋)	
授業の目標	大学の授業に主体的に臨めるよう、また授業以外の自らの関心事について理解を深められるよう、インターネット情報源及び大学図書館の活用方法を習得する。
授業の内容	情報がどのように発生し、公表され流通するのか、大学生の基礎的素養として修得することが期待される情報リテラシーとは何か、以上の点を中心にインターネット情報源をどのように活用するか、大学図書館をどのように利用できるかについて事例の紹介をしつつ授業を進める。
授業計画	1. 大学生の学びの機会
	2. 大学生と情報リテラシー
	3. 情報の発生と流通はどうなっているのだろう
	4. パッケージ型情報と非パッケージ型情報－インターネット情報源と印刷系情報源－
	5. インターネットを上手く使おう1－利用のマナー、GoogleやYAHOO!の使い方など他－
	6. インターネットを上手く使おう2－電子図書館、情報技術の活用他－
	7. 書店はどうなってるの、アマゾンって
	8. 図書館はどう考えてる
	9. 立教大学図書館って評判いいらしい
	10. OPACでできること、できないことのサポートシステム
	11. 基本的な調べもののツールを学ぼう
	12. 「テーマを持って真理を探究する」ための学び方
	13. さあ、楽しく学ぼう
	14. まとめ
成績評価方法	筆記試験 60%
	平常点 40%(出席率20%、提出物20%)

2016年度春学期「学びの精神」授業実践例③

「法と政治の世界」

(担当：兼任講師 笠井 昭文)

この授業では映像資料を人間や社会の問題について考える材料として使用し、できるだけ平易に政治学の概念や思想、特定の問題を論じようとするものである。

学生への成績評価としては、定期試験の他に平常点として小レポートの提出課題を行った。具体的には、各回で提示するテーマの中から選択して合計4回以上小レポートを提出してもらうという方法である。そして今回の特徴として、提出されたレポートは、授業にご協力頂いた教育コーチ（1名）が添削し、教育コーチからの評価を加えて学生へのフィードバックを行った。以下、授業を振り返り、その教育効果と問題点をまとめた。

【教育効果】レポートを書く能力において、かなりの改善が見られた

本授業「法と政治の世界」と並行して、「多彩な学び」の科目である「政治と社会」も担当しており、同じようなレポート課題を提示していた。添削指導がない「政治と社会」の場合、レポートというより、単なる思いつきを連ねたようなコメントの文章を最後まで提出してくる学生が見受けられた。だが、「法と政治の世界」ではレポート添削により、「求められている文章はこれではない」とはっきり示され、何が出来ていないか指摘されてレポートが返却されるため、学生の方も小レポートらしく仕上げようと工夫するようになる。また、「法と政治の世界」のレポートは、対象が2年次以上の「政治と社会」のレポートに比べると、取り上げる題材の豊かさや切り口の鋭さの点では見劣りするが、明らかにレポートらしく仕上がっている。内容は不十分であっても、レポートの型や体裁というものを意識して、自分の文章を仕上げる姿勢が身につくことは、一年次の学生にとって大切なことではないだろうか。最終回で実施したアンケートでも、「今までレポートを書いたことがなかったので、添削指導はとても助かる」という回答が何件もあった。

【問題点】添削指導の継続性、他の講義での応用が難しい

今回「法と政治の世界」は80名の履修者であったが、提出されるレポート数は、毎回25～35枚程度、40枚を超えた時も一度あった。この分量では、添削作業は一日かかり切りの作業量になり、場合によっては二日に亘る。担当の教育コーチには全部で14回添削していただいた

が、この作業量に相当する手当を用意しない限り、引き受けて下さる方を見つけるのは簡単ではない。

また、現行では履修者数の多寡にかかわらず、1名の教育コーチしか配置できない。しかし、今年度80名の履修者が仮に来年度2倍に増えた場合、提出されてくるレポート数も比例して2倍になり、1名の教育コーチでは添削作業が完全に行き詰まる。履修者数の上限を例えば80～100名にするか、あるいは、履修者数に応じて教育コーチを増員できるような態勢が整っていない限り、添削指導を今後も確実に実施していくことはかなり難しい。小レポートの提出回数を制限するという方法があるが（現行は「最低4回提出、上限なし」だが、提出回数に上限を設ける等）、添削指導は何回か繰り返さないことには改善が見込めないため、制限するにしても限界がある。

さらに、今回の添削指導に協力頂いた教育コーチは、大学院に在籍中で外国人留学生への添削指導経験があり、また、賃金に見合わぬ仕事量であるにもかかわらず、添削を通じた学生との対話に価値を見出していた方であった。このような方に教育コーチを引き受けていただいたという幸運に支えられて成立していた今回のレポート指導である。しかし、仮に今回協力頂いた教育コーチが担当できなくなった場合、あるいは、履修者数に応じて教育コーチを増員できるようになったとしても、このような添削指導に携わる熱意があり、かつこの仕事をお任せできる人材を見つけることはすぐには難しい。教育コーチを活用して、もう一步踏み込んだ授業計画を立案しようにも、教育コーチをお願いできる人材と手当が確保できないために、諦めざるを得ないという先生方もいらっしゃるのではないだろうか。その点で、TAなどの「授業補助」とは異なり、教育コーチは「教育指導」に携わる人材と位置づけ、学内外から事前に募集しておくということも考えられる。教育指導への意欲や関心があり、ある程度の論文執筆経験があるとなると、おそらく研究職・教育職を目指している博士後期課程の院生に限られてくるのではないか。そのような人材を事前に募集・登録しておき、随時、彼らに教育コーチを依頼できる態勢を構築しておかないと、教育コーチの活用を前提とした授業計画というのは、立案が難しいように思う。

「グローバル教養副専攻」の2つのコースについて

全学共通カリキュラム運営センター副部長／経済学部教授 中島 俊克

自らの専攻とは別に、特定の海外体験を目標に大学で体系的に学ぼうという「グローバル教養副専攻」の仕組みが、2016年度以降学部1年次入学の学生からスタートしたのに伴い、全学共通カリキュラム運営センターからも「Arts and Science Course」と「Language and Culture Course」を提供している。履修が義務付けられない副専攻コースであるにもかかわらず、春学期末の説明会には800名以上の参加があり、秋学期からは、来年7月に行うコース登録に向け、自ら立てた計画に沿って科目を履修している1年生諸君も相当数いる模様で、順調な滑り出しを見せている。

両コースは、すでに大部分が全学共通科目の中に存在している科目の中から、両コースの中の「テーマ」が定めるルールに従って「日本発信科目」「基幹科目」「言語力科目」の3系列から計26単位以上を修得し、これに海外体験（それ自体は副専攻の単位とならない）の認定を加えて、コース修了とするものである。副専攻のために修得した単位は、各学部の定める卒業要件単位にもカウントされるため、これらの副専攻コースをとる学生は、追加的な科目履修を行う必要はほとんどなく、全学共通科目を中心に、科目のより体系的な修得を心掛けるだけでよい。テーマの種類は各コースそれぞれ8つであり、「Arts and Science Course」では海外体験の種類ごとに、「Language and Culture Course」では言語およびその活用法ごとに分かれている。それぞれの詳細については、グローバル教養副専攻のホームページ（<http://s.rikkyo.ac.jp/rmp>）を参照されたい。

「Arts and Science Course」は、自分の専門の勉強とは別に、各人が計画している海外体験をひとつの目標に学びを組織することで、大学生活を有意義に過ごしてもらうという趣旨の副専攻コースである。専攻する学部学科での専門の勉強も大事であるが、学生諸君の知的・美的・身体的欲求は大抵、そうした専門の勉強だけでは満たされない。そのために全学共通科目があり、特定の海外体験を結びつけることで、これを体系的に履修してもらおうということである。従って、各テーマの受講科目は全学共通科目「多彩な学び」の各カテゴリーにはほぼ相応している。海外体験は、各学部等が提供している実質5日間以上の海外研修コースであれば基本的に認定され、自主企画もテーマと整合的であれば認定される。

「Language and Culture Course」は、旧カリの「言語副専攻」を衣替えしたものである。若くてまだ頭が柔らかいうちに、必修で課される以上に外国語を深く学んでおくことは、学生諸君の人生にとって限らない価値がある。さらにある程度厳しい海外研修で実力を確認すれば、自信につながるであろう。そうした趣旨から、英語に関する3テーマでは、副専攻の海外体験として認定される英語海外研修を、立教大学主催のプログラムに限定しており、言語Bにかかわる5つのテーマについても、各言語について実質10日以上海外研修受講を認定の条件としている。

大学生活の4年間、やりたいことはたくさんあるであろうが、2016年度以降入学の学生諸君は、ぜひこの仕組みを生かし、より有意義な学生生活を送っていただきたい。

●●●「多彩な学び」の新科目●●●

2016年度より全学共通科目の総合系科目は「学びの精神」「多彩な学び」「スポーツ実習」の3つの科目群に分類している。

「多彩な学び」については、1年次秋学期以降（形成期以降）での履修となっており、上記「グローバル教養副専攻」の修了要件単位の対象科目にもなっている。ここでは、2016年度より新たに開講した科目を紹介する。

◆多彩なことばと文化を垣間見る科目群

言語系科目で開講している英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語、ロシア語、日本語、ポルトガル語、日本手話以外の言語を主な対象として、ことば（言語）とその背景にある文化や社会事象を講義科目として学ぶことを目的とする。

科目名			
アジアの文化とことば	ヨーロッパの文化とことば	ラテンアメリカの文化とことば	ロシア・東欧の文化とことば
中東の文化とことば	アフリカの文化とことば	イタリアの文化とことば	

◆F科目（外国語による日本研究科目）中級

外国語による日本研究科目であり、基本的に外国語で授業を行う。世界中の人とコミュニケーションをとるために、言語を学ぶだけでなく、外国の事情や日本の事情を外国語で伝えられるようにする。新たに「中級レベル」（TOEIC550点程度以上）として5つの講義科目を開講。

科目名				
Japanese Arts A	Japanese Arts B	Japanese Ethnology	Japanese Mind	Science Studies

新しい英語教育カリキュラムの特徴 ―必修英語科目改訂のポイント―

英語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部准教授 師岡 淳也

立教大学では、2010年度に発信力養成の重視と少人数クラスを特徴とした英語教育カリキュラムを導入し、学生の間で高い評価を得てきた。2016年度に始まった新カリキュラムでは、こうした方針や必修科目単位数などの基本的な枠組みは維持しつつも、発信力と受信力、オーラルスキル（聞く・話す技能）とリテラシースキル（読む・書く技能）のバランスを考慮して、必修英語科目に幾つかの変更を加えた。

最も大きな変更点は、「英語リーディング＆ライティング」の新設である。昨年度まで6つの必修科目（「英語ディスカッション1,2」「英語プレゼンテーション1,2」「英語ライティング」「英語eラーニング」）のうち、オーラルコミュニケーション中心の科目が4科目を占めていた。新カリキュラムではプレゼンテーションを半期完結の科目とし、「英語リーディング＆ライティング」を春秋両学期に開講することで、オーラルスキルとリテラシースキルに特化した科目のバランスをとるようにした（表1）。これまでは各科目の中で読解活動を行なうことでリーディング・スキルの向上を図っていたが、リーディングとライティングを有機的に組み合わせた科目を設けることで、1年間かけてより体系的に文章を読み書きする力を育成することが可能になった。具体的に春学期は様々なパターンの文章を読んだり、精読と多読の両方の訓練を積み重ねたりと、読解力の向上に主眼を置くとともに、内容の要約などを通してライティングの基礎力をつけることも狙っている。秋学期は、書くために読むという位置づけで読解活動を取り入れながらも、パラ

グラフの書き方からエッセイ・ライティング、そしてリサーチペーパーの作成まで、学生の英語力に応じたライティング・スキルの育成に重点を置いている。

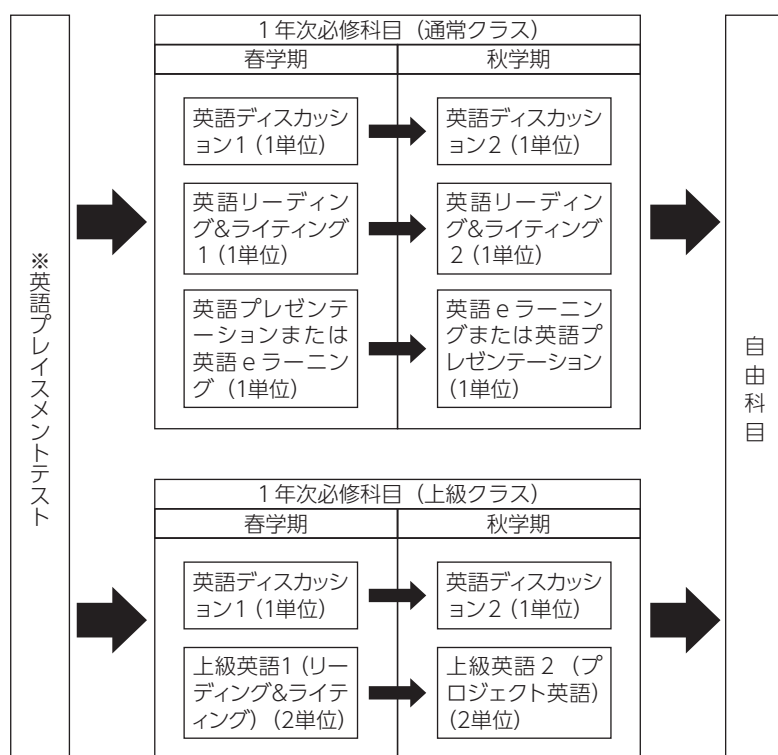
2つ目の変更点は、プレイスメントテスト（TOEIC IP）で高得点を取った学生を対象とした必修英語科目履修免除制度を廃止し、新たに最上級クラス「上級英語」を設置したことである（表1）。通常レベルのクラスとは異なり、「上級英語」は週2回の集中クラスで行なわれ、既に一定レベル以上の英語運用能力をもつ学生が英語でアカデミックスキルを身につけるとともに、授業で扱った学問領域への関心も深めていくことを目指している。春学期の「上級英語1（リーディング＆ライティング）」では、アカデミックな内容の英文を読む力を鍛えつつ、引用や文献リストを含む本格的なリサーチペーパーの書き方を学んでいく。秋学期の「上級英語2（プロジェクト英語）」はより内容重視の科目となり、グループで設定したアカデミックなテーマについてディスカッションやプレゼンテーション、リサーチペーパーの執筆を行なっていく。このように「上級英語」ではアカデミックな活動を英語で行うことで、より高度で総合的な英語運用能力を養成することを狙っている。

3つ目の変更点は、必修英語科目不合格者を対象とした科目「英語R」の新設である。近年入試制度の多様化や社会情勢の変化により、入学する学生の英語力の差が広がり、大学で英語の基礎力を改めて学ぶ必要のある学生が増えている。立教大学では、ディスカッションを除く必修英語科目が不合格となった学生は、「英語単位認定試験」に合格することでその科目の単位

を取得することになっているが、本年度より単位認定試験制度は維持しつつも、英語でのコミュニケーションに必要な最低限の文法事項や語彙を修得することを目的とした「英語R」を新たに設けることにした。英語の基礎力の学び直しという科目の性質上、そして英語単位認定試験の補完的役割というカリキュラムの位置づけ上、1人につき1回までの履修を前提としているが、新カリキュラムでは「上級英語」とともに「英語R」を開講することで、学生の英語レベルや学習経験に応じて、より適切な学びの機会を提供することを目指している。

このように、新しい英語教育カリキュラムは、従来の枠組みを堅持しつつ、更なる深化と進化を目指したカリキュラムだといえる。なお、紙幅の都合で、必修英語科目の履修を終えた学生向けの自由科目や副専攻コースの改訂のポイントについては触れることができなかった。こちらについては、「グローバル教養副専攻」の特設サイト（<http://s.rikkyo.ac.jp/rmp>）や2016年度「履修要項」「シラバス」をご参照いただきたい。

表1 英語科目履修チャート



※プレイスメントテストによってレベルを判定し、自分のレベルにあった英語科目を履修します。

【新チームリーダー挨拶】

総合チームリーダーの雑感

全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームリーダー／理学部教授 松山 伸一

2016年度から新しい教育カリキュラム「RIKKYO Learning Style」が導入された。入学直後の導入期には立教ファーストタームプログラムによって、全カリ提供の「学びの精神」と学部提供の「学びの技法」で動機づけとスキル習得を行い、大学での学びを円滑にスタートしてもらう。その後、形成期と完成期の教育を経て自己変革力を身につけた学生を輩出する。この新制度の理念の実現に向けて総合系科目を機能させることが私の務めだ。

勉学に高い意欲をもって入学してくる学生は多いが、正しい行動に結びついていない学生がいることは感じていた。高校までのかゆい所に手が届く至れり尽くせり教育の中で少数の入試科目に特化して勉強してきた新入生に、大学生になったのだから「甘えるな、自己責任」、「頼るな、自助努力」と突き放してもかわいそうだった。18歳人口の減少にとまって生じたこの手の問題に対応するために登場したのが立教ファーストタームプログラムと、履修に方向性をもたせるグローバル教養副専攻である。学びの自由度は残しつつも、高校と大学のギャップに戸惑う一定数の学生をエスコートしてくれる懐の深い立教ならではの制度だ。過度な至れり尽くせり教育は失敗から学ぶ機会を奪う。人は成功したときより失敗したときに力の差が出るようだ。プチ成功体験も大切だが、つまずきも貴重な糧となる。一人ひとりの学生が4年間の学びを自分の生と強く結びつけてほしい。

「RIKKYO Learning Style」によって、言語を含めた全学共通科目が各学部の専門科目にうまく溶け込んでいくような枠組みが出来上がったと理解しているが、総合系科目を未だにお荷物と感じる学生も多いだろう。好きなことだけをやりたい、知りたいことだけを学ぶのでは、自分を変える力はなかなか育めない。嫌々ながらも乗り越える力は自分の専門を深める力になる。希望の職業に就いても好きなことだけつまみ食いしては仕事にならない。自分の興味のないものにも関心がもてる探求心の強さは必要だ。チャレンジしてほしい。

教育はむずかしい。学ぶ主体は目の前にいるのか、自分はこれでよいのかといつも不安になる。教育に再現性はない。だから、自然科学のように法則や普遍性を求めてはいけな。とは言うものの、学生の主体性と教員の熱意は制度や時代を越えた教育の両輪だろう。その潤滑油としての役割が「RIKKYO Learning Style」に期待されている。

【大学教育学会第37回大会参加報告】（2016年6月11日（土）～6月12日（日） 於：立命館大学大阪いばらきキャンパス）

職員の専門性について考える

教務部全学共通カリキュラム事務室 小島 緑

今年度、教務部ならびに新座教務課の有志職員で「教務業務に関する企画提案型グループ研修」に取り組んでいる。テーマは“立教型「教職協働」モデルの考察”である。大学の教育改革・グローバル化が進展している今、大学を安定的・積極的に運営するためには教職員が今まで以上に一体となって協働することが求められているため、「教職協働」の在り方を多角的に調査し、その考察によって「教職協働」の整備が有効と評価された際には、立教型「教職協働」モデルを提言する、というものである。

大学教育学会には、研修のヒントを求めて参加した。なかでも興味深かったラウンドテーブル「これからの大学における教育・学修支援の専門性」について報告したい。

このラウンドテーブルでは、千葉大学アカデミック・リンク・センターが発表を行った。本センターは、これからの大学に必要とされる新たな専門的職員「教育・学修支援専門職」の確立と養成を目的としたプログラムを運営している。当日は、アンケート調査・文献調査・インタビュー調査の結果をもとに作成された「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリック」が披露された。資料には、「学生・学修・教育支援への内容」「大学についての知識」など6領域に分けて項目が並べられ、項目が含む要素として行動特性が示されていた。

「教職協働」の場では、教員と職員が互いの能力や専門性を発揮し、多角的な視点で問題に取り組むことが重要である。教員が発揮するのが研究分野における専門性であった場合、職員が発揮できる能力や専門性とは何なのか。これは人によって様々な認識となっており、学内でもそのニーズは把握されていない。そのため、この発表は職員の専門性を考える上で非常に参考になった。資料は千葉大学アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラムホームページにも掲載されている（2016年9月末現在）ので、興味のある方は是非見ていただきたい。

冒頭に述べた研修は、12月に最終報告を行うことになっている。ラウンドテーブルの発表では、意欲的に研修に参加する職員の方が、専門性へのニーズを高めるとの結果が出ていた。筆者も、研修を通して自らに必要な専門性を知り、身につけていくことができるよう、引き続き取り組んでいきたい。

2016 年度 全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2016年9月現在

〈全カリ委員会〉

役職名	氏 名	所属	
部 長	佐々木一也	文	文
副部長	中島 俊克	済	済
チーム リーダー	新野 守広	異	異 言語チーム
	松山 伸一	理	生命 総合チーム
運営セン ター委員	西原 廉太	文	キ 文学部長
	須永 徳武	済	済 経済学部長
	北本 俊二	理	物 理学部長
	松本 康	社	社 社会学部長
	神橋 一彦	法	法 法学部長
	毛谷村英治	観	観 観光学部長
	三本松政之	福	コ政 コミュニティ福祉学部長
	石川 淳	営	営 経営学部長
	塚本 伸一	現	心 現代心理学部長
	池田 伸子	異	異 異文化コミュニケーション学部長
	井川 充雄	社	メ 教務部長

〈言語教育研究室〉

研究室名	氏 名	所属	
英語	主任 師岡 淳也	異	異
	Caprio, Mark E.	異	異
	Cousins, Steven D.	異	異
	Cunningham, Paul A.	異	異
	河合 優子	異	異
	川崎 晶子	異	異
	小林 悦雄	異	異
	Martin, Ron	異	異
	森 聡美	異	異
	高橋 里美	異	異
	高山 一郎	異	異
	武田珂代子	異	異
	鳥飼慎一郎	異	異
	山田久美子	異	異
	山本 有香	異	異
ドイツ語	主任 新野 守広	異	異
	浜崎 桂子	異	異
フランス語	主任 中川 理	異	異
	石川 文也	異	異
スペイン語	主任 佐藤 邦彦	異	異
	谷野 典之	異	異
中国語	主任 細井 尚子	異	異
	石坂 浩一	異	異
諸言語	イヒヤンジン	異	異
	新野 守広	異	異 ¹

〈総合系科目構想・運営チーム〉

役職名	氏 名	所属	
リーダー	松山 伸一	理	生命
メンバー	後藤 雅知	文	史
	浅妻 章如	法	国ビ
	西山 志保	社	社
	沼澤 秀雄	福	ス
	小森 靖	理	数

〈全カリサポーター〉

	氏名	所属	グループ ^{*2}
学部選出	阿部 善彦	文	キ 人 文 学
	山田 康裕	済	会 社 会 科 学
	横山 和弘	理	数 自 然 科 学
	砂川 浩慶	社	メ 社 会 科 学
	林 美月子	法	法 社 会 科 学
	千住 一	観	交 社 会 科 学
	結城 俊哉	福	福 社 会 科 学
	辻 洋右	営	国営 社 会 科 学
	篠崎 誠	現	映 人 文 学
	星野 宏美	異	異 人 文 学
	石坂 浩一	異	異 社 会 科 学
	安松 幹展	福	ス スポーツ人間
総長任命	日高 聡太	現	心 スポーツ人間
	細井 尚子	異	異 人 文 学

*2 サポートグループ

人文学系サポートグループ
社会科学系サポートグループ
自然科学系サポートグループ
スポーツ人間科学系サポートグループ

〈言語系科目構想・運営チーム〉

役職名	氏 名	所属	
リーダー	新野 守広	異	異
メンバー	師岡 淳也	異	異 英語教育研究室主任
	新野 守広	異	異 ドイツ語教育研究室主任
	中川 理	異	異 フランス語教育研究室主任
	佐藤 邦彦	異	異 スペイン語教育研究室主任
	谷野 典之	異	異 中国語教育研究室主任
	石坂 浩一	異	異 諸言語教育研究室主任

*1 言語チームリーダーとの兼務

2016年度 全カリシンポジウムの開催について

「しょうがいしゃ学生にとっての外国語学習—その意味、そして教育と支援へのアプローチ」

日時：2016年11月5日（土） 14:00～16:00

場所：池袋キャンパス11号館 A301教室

全カリ言語教育研究室は、しょうがい学生支援室と連携しながら、外国語学習のよりよい支援について検討を重ねている。本シンポジウムにおいて、検討や実践を通じて得た知見等を還元し、多くの言語教員がしょうがい学生への支援方法を考えるきっかけとする。なお、2010年度全カリシンポジウムにおいてもしょうがい学生支援に関するテーマを取り扱っており、その際は聴覚しょうがいに関する講演・事例報告を行ったため、今回は視覚しょうがい支援に着目した講演・事例報告を行う。

全カリニュースレター No.40

印刷 2016.9.27

発行 2016.10.6

発行人 佐々木 一也

編集人 松山 伸一、後藤 雅知

発行所 立教大学
全学共通カリキュラム
運営センター

印刷 株式会社 白峰社